

(論 文)

## 19世紀後半のアメリカ社会と動物 — バッファロー乱獲をめぐる議論の分析を中心に

白石(那須) 千鶴

---

### キーワード

バッファロー乱獲    動物擁護運動    ネオラマルク主義    バッファロー保護法案  
文明観

---

### はじめに

本稿は、19世紀後半のアメリカ合衆国における動物をめぐる問題に焦点を当て、そこから映し出されるアメリカ社会の「文明観」を分析描写することを目的とする。19世紀後半のアメリカ社会では、東部の都市を中心に動物擁護団体が次々と組織され(巻末表1参照)、社会改革運動の一環として人道主義者たちが動物擁護運動を始めていた<sup>註1</sup>。他方、時期を同じくしてアメリカ西部の荒野では、開拓が推進される大平原で大量のバッファローが乱獲され、絶滅寸前まで激減していった。動物擁護活動のための組織が結成されていた同じ時期にアメリカ国内において大規模に野生動物が乱獲されていたことは、動物に焦点を当てて社会を見ていく観点において非常に重要な事例である。

アメリカで野生動物保全の運動がスポーツハンティング愛好者主導の形で本格的に開始されたのは、20世紀初頭に入ってからのものであった<sup>2</sup>。最も有名な実力者としてセオドア・ローズベルト(Theodore Roosevelt, 1858-1919)の名前をあげることができる。この運動は、野生動物絶滅防止のための活動として展開されたものであり、スポーツハンティングで動物を射止める行為そのものから動物を保護することを意図した行為ではない。19世紀以来、動物の「痛み」に配慮してきた動物愛護運動とは運動の性格も目的も異なる。すなわち、バッファローなどの野生動物乱獲防止に人道主義者たちの動物擁護活動は、大きな成果をあげられなかったのである。野生動物保全の活動が本格化されるまでにバッファローは殆ど絶滅に近い状態まで乱獲されたわけだが、その野生動物乱獲を推進した動物観、および動物擁護論の動物観の再検証からアメリカ社会の動向の分析を行うことが本稿の目的である。

バッファロー乱獲をめぐる研究は、環境史の分野で重要なテーマのひとつとして扱われてきた。<sup>1</sup> その動向は、連邦軍主導の先住民政策としてバッファロー乱獲が行われたことを詳述する議論、および、連邦軍に加え毛皮猟師たちによる乱獲が大きく影響を与えたことを詳述する議論をあげることができる。前者の研究では、南北戦争後本格化した西部開拓の前線部隊で、多数の軍指揮官たちがバッファローの殺戮を促進していったことが、彼ら司令官たち自身の残した記述の分析から明らかにされている。その研究成果は先住民政策の歴史を掘り起こす重要な情報を提供しており、そこ

---

しらいし(なす) ちづる: 淑徳大学 国際コミュニケーション学部 兼任講師

には先住民の食糧を枯渇させることを目的としていたこと、先住民を直接虐殺する代わりに、食糧であるバッファローの殺戮が行われていたことが明らかにされ、その行為に内在する色濃い人種主義的性格が浮き彫りにされた。さらに最近、環境史家A.アイゼンバーグ（Andrew C. Isenberg）による白人毛皮猟師の存在と当時の産業構造全体に注目した興味深い研究が出されている。すなわちそれによると、バッファローが絶滅近くまで激減した原因として、軍によるバッファロー殺戮に加え、毛皮猟師による乱獲、なめし産業の過熱化、家畜の大量侵入などの人為的要因と、干ばつ、ブリザード、草原火災、伝染病の蔓延などの自然環境要因により、1883年には西部の大草原で生きたバッファローは殆ど見られなくなるまでに至ったことが、詳述されている<sup>3</sup>。本稿では、こうしたこれまでの環境史などの研究成果を踏まえた上で、バッファロー乱獲をめぐる議論を再検討する。

## 1. バッファロー絶滅危惧の要因が映し出す大平原の変容

バッファロー（アメリカバイソン）がかつて縦横無尽に駆け巡っていたアメリカの大平原（グレートプレーンズ）は、東はミズーリ川から西はロッキー山脈の麓まで、北はカナダの南側から南はメキシコまで広がる広大な地域である。年間の平均降水量は24インチ未満という半乾燥地帯で、短茎イネ科草本が広がっていた。この大平原の南北戦争直後のバッファローの生息数は、推計で1500万頭という説や600万頭から800万頭とする説などがある<sup>4</sup>。1830年代に大平原を旅して手記を残したG.カトリン（George Catlin, 1796-1872）によると、バッファローが「あちこちで文字通り何マイルもプレーリーを黒く埋め尽くす程の数で集まっているところを目の当たりにして圧倒された」と言う。「何千頭ものバッファローが1つの塊になって、土ぼこりの雲の下で渦を巻くように旋回している。その塊全体が、継続的に動き、鈍く響きわたる低い声を上げながら、遠く離れた雷のような音を立てて数マイル先の所に現れた」<sup>5</sup>という記述が残されている。南北戦争前の白人開拓者たちがまだ殆ど入植していない頃の様子を知る重要な手がかりである。

見る者を圧倒する程の群れをなしていた大平原のバッファローは、しかし1880年代には、生きたバッファローを見かけるのは困難と言われるまでに激減していった。代わりに残されたのは、毛皮をはがれた死骸や、白い骨だけだった。1885年には、「この20年のうちに、カウボーイたちがインディアンに取って代わり、テキサスロングホーンの子牛がバッファローに取って代わった」<sup>6</sup>という記述が残っている。バッファローの死骸が悪臭を放ってあちこちに散乱する有様は、フロンティアラインの消滅を目前に控えて大陸横断鉄道も各地で連結が進み「文明化」を実現させていたアメリカ西部開拓の残酷な一面を如実に映し出す光景であったことに注意したい。

こうしたバッファローの激減を、当時は自然環境による現象として捉えたり、あるいは先住民の加担を重視する動向が存在していた<sup>7</sup>。確かに大平原の先住民民族の中には19世紀中頃、白人との毛皮交易のためにバッファロー狩りを加速させていく部族民もいた。しかしその後の研究でも示されているように、本格的に白人入植者たちが増加する南北戦争後のアメリカ軍兵士による殺戮、白人毛皮猟師たちの勢力による圧倒的影響力を鑑みれば、先住民の加担は比較にならないほど小さい。  
2. 白人毛皮猟師たちによるバッファロー殺戮は、大陸横断鉄道の建設という輸送システムの急速な進歩、およびバッファローの皮をベルトコンベアーとして利用するオートメーション化による需要の増加など、大規模化した産業構造が支えていた。すなわちアイゼンバーグが分析しているように、19世紀後半のバッファロー乱獲は、産業化の拡大あるいはその衝動を土台として大規模に行われた出来事と捉えることが重要であろう<sup>8</sup>。

白人毛皮猟師たちは、射撃人ひとり、料理人ひとり、皮を剥ぐスキナー3、4人という小さな集団を、親族などを中心に構成して西部の草原へ獵に出かけていった。1870年代の最盛期には大平原

南部の地域だけでも、こうした集団で少なくとも千人の猟師たちが猟をしていたと言われる。彼らのバッファロー狩りのスタイルは、騎馬型先住民部族のように馬に乗って走りながらバッファローを追うランナーというスタイルが好まれたようだが、多くは家畜の牛を一頭殺し、そのにおいてバッファローを誘き寄せ、待ち構えた形で銃弾を撃ち込む方法がとられた。使用するライフルも改良が進み、熟練した猟師なら一発か二発で大きなバッファロー一頭をしとめたようだ。しかし平均的あるいはそれ以下の技術の猟師たちは、何頭ものバッファローを銃弾で傷つけながら一頭をしとめるといことが多く、そのため傷を負いながら逃れオオカミの餌食になるバッファローも大量に発生していた<sup>9</sup>。

こうした毛皮猟師たちが大平原の南部地域で殺戮したバッファローの数の概算を知る手がかりが、当時の記述から得られる。それによるとテキサスで1876年からの一年間に熟練した猟師ひとり一日75頭から100頭、平均するとひとり50頭のバッファローをしとめていたようだ。熟練したスキナーは、一日60頭から75頭のバッファローの皮を剥ぐことができたという。1872年から1874年の間には平均して一年に100万頭のバッファローが、白人毛皮猟師たちによって殺害された。こうしたペースで毎年大量の皮が、なめし業者たちに提供されていたという概算がなされている<sup>10</sup>。これだけの量の皮の運搬を可能にしたのが、大陸横断鉄道の拡張である。

広大な北アメリカの大陸を東西に結ぶ鉄道の建設は、1850年代以前から構想されていたが、南北間の地域対立が終った南北戦争後から実現されていった。1869年にユニオンパシフィック鉄道とセントラルパシフィック鉄道がユタで連結されたのをはじめとして、1870年カンザスパシフィック鉄道がデンバーへ、1872年にはアチソン・トピーカ・サンタフェ鉄道がカンザス州ドッジシティへと、次々に到達して行った。こうした鉄道網の拡大によってアメリカの市場が一挙に連結され、毛皮猟師たちの剥いだ毛皮の大量輸送に拍車がかかった。とくにサンタフェ鉄道が到達したドッジシティは、毛皮取引の中心地となり、早朝から深夜まで毛皮を運ぶ荷馬車が運び込まれ一挙に活気づいた。最大の毛皮取引業者は、サンタフェ鉄道で20万枚もの毛皮取引引きをしたという記録も残っている<sup>11</sup>。

大平原南部地域の商業目的の毛皮猟の拡大が、サンタフェ鉄道の完成と呼応しているように、大平原北部地域のバッファロー乱獲は、ノーザンパシフィック鉄道の完成とともに勢いを増していった。同鉄道が1881年に到達したモンタナ準州のマイルズシティでは、1880年の一年間に851トンだった毛皮取引引きが、1881年には2,250トン、1882年には1,940トンと急増し、36万頭分の死骸がそのまま残された<sup>12</sup>。こうして西部の大平原は、大陸横断鉄道の拡張により産業化の進むアメリカで、高まる資源需要に確実に応えてくれる供給地として組み込まれていったのである。

大平原のバッファローを乱獲していたのは、毛皮猟師たちだけではなく。西部の調査および白人入植者たちの保護の目的で、多数のフロンティア部隊が西部に赴いていた。彼らは食糧確保の名目でバッファローを殺害していたが、南北戦争時に南部の都市を破壊し尽くしたことで有名なシャーマン将軍（General William T. Sherman, 1820-1891）は、西部の開拓地でもその破壊性をバッファロー殺戮に発揮した。先住民との戦いに苦戦した時に、矛先をバッファローに向けて射撃の実戦に利用するなど、兵士たちのフラストレーション解消にバッファローを乱獲させていたことなどが、これまでの研究で詳述されている。さらに、同じ時期、西部のフロンティアで軍の指揮をとっていたシェリダン将軍（General Philip H. Sheridan, 1831-1888）の書簡からは、バッファローが消滅すれば先住民を制圧できるという意図で兵士や毛皮猟師たちにバッファロー射撃を奨励していたことが記されている<sup>13</sup>。

軍のバッファロー殺戮の奨励については、決して正式な形で命令が出されていた訳ではない。し

かし、毛皮猟師たちの次のような記述が手記などに残されていることから、その影響力を汲み取ることができる。

西部平原の指揮を執る軍の将校たちは、あらゆる形でバッファローの殺害を奨励していた。その奨励の一例は、我々ランナーにとってありがたい実用的な性格のものだった。つまり弾丸を、しかも無償で、使用できる限り、あるいは欲する限り、いや、必要とする以上に大量に提供してくれた。それを入手するためにすべきことは、ただフロンティア軍の駐屯地に出向いていって弾丸が不足していると言ひさえすればいいのだ<sup>14</sup>。

バッファローの殺害は、軍によってこうした形で奨励され、政府の方針と理解されて毛皮猟師たちに捉えられていたことが、数々の手記から読み取られている。

しかしバッファローの絶滅寸前までの激減は、毛皮猟師たちの乱獲や軍による殺戮だけでは説明がつかない。移動性の高いバッファローの自由な往来を妨げる家畜の大量投入が致命的な打撃を与えたことも、バッファロー激減を招いた重要な要因としてあげなければならない。1868年から1869年にはテキサス牛の群れが、プラット川の北側に到達していた。1874年から1880年にはワイオミングにその数は、9万頭から50万頭に達していた。さらに1883年には50万頭を超える数のテキサス牛がモンタナ州東部に集中し、1874年から1890年にはアラバマ州の南の地域に10万頭を数えるまでになっていた。こうした家畜の群れは、テキサス熱などの牛の伝染病をもたらしただけでなく、バッファローの自由な移動を妨げる大きな障害物となった。そのため、干ばつやブリザード、草原火災などの自然災害がバッファローを直撃した<sup>15</sup>。1880年代には、銃弾のあともない無傷の状態のバッファローの死骸がダコタ準州で多数発見されていたことが記録されている<sup>16</sup>。

南北戦争後に本格的に推進された西部開拓は、バッファローに過酷な環境の変化を余儀なくし、かつては何マイルも続く群れとして圧倒する程の数が生息していた大平原で、1880年代終わり頃には、その数は数百頭の報告数にまで激減していった。この激変に対しアメリカ社会はどのように対応し、議論していったのか、そこからどのような社会観が見えてくるのか、バッファローの激減をめぐる議論から分析したい。

## II. バッファロー保護法案と「穏やかなバッファロー」

バッファローが西部の大平原で激減していることは、1869年には既に指摘されていた。*New Harper's Monthly Magazine*には「バッファローは1858年以来、確かに減少している」として次のように記述されている。

4 バッファローが急速に消滅しつつあることは、疑いの余地はない。インディアンたちが言うように、バッファローの群れは少なくなっている。牧場主たちも同様に証言している。毛皮取引引きではロープの値段を引き上げている<sup>17</sup>。

1873年の地方新聞には次のように、さらに深刻な論調の記述が掲載されている。

大平原のバッファローは運命に直面した。浸食する文明が、彼らの破滅を確実にした。人間の法外な貪欲さが、バッファローを地上から一掃してしまった。数年前まで、巨大な群れが大平原を歩き回り、インディアンたちが必要とするだけ狩りをしていたに過ぎなかった。しかし今では、



皮を利用するだけのために犠牲となったその高貴な動物は、白い骨と化し何百万も、横たわっている<sup>18</sup>。

こうしたバッファローの激減に対し、連邦議会では1874年および1876年の二度、保護法案が提出されていた。イリノイ選出のG.フォート下院議員（Greenbury L. Fort, 1825-1883）は、「アメリカの準州において、インディアン以外の者による雌バッファローの殺害を禁止すること、および雄バッファローに関しても、食糧のため殺害する場合にのみ制限付きで許可すること」を規定する法案を提出していた。提案理由として「公共の領地を住まいとしているインディアンと、バッファローを食糧とする可能性のある開拓最前線の人々のためにバッファローを保存すること」と述べ、「（バッファローが）大量殺害され続けることから、何も利益は生み出されない。この動物は無害であり、誰も傷つけない。この動物は文明化と対立するものではない」と、「穏やかなバッファロー」のイメージを提供していた。その説明はさらに、先住民の食糧のために「年間、膨大な予算をかけて」家畜の肉牛が使用されていることを取り上げ、「我々のいかなる費用もかからずに自然の中で成長している大平原の群れを無益にも残虐に殺害しながら、これらの動物に代わる家畜動物を膨大な経費を使って供給するのは、間違っている」と極めて実用的な訴えが続いていた<sup>19</sup>。

フォート議員が提案したバッファロー保護法案に賛同する意見は、バッファローの有用性の指摘と「気高く穏やかな動物」とするイメージが強調されていた。例えば、法案支持の下院議員は、法案成立を強く望む二人の軍人の書簡を引用して支持を訴えたが、その手紙はともにバッファローを「高貴な動物」と表現していた。引用された現役将校の文書は「バッファローは、無害な動物であり、性質は臆病で家畜の雌牛と同じほど捕獲しやすく食糧としても有益である。農業には不向きな乾燥地帯の平原に繁茂する低草を食べて生息している」として「気まぐれな殺害から守る」ことを強く嘆願していた。二通目の手紙は退役軍人によるもので「大草原で年々増加しているバッファローの殺害は身勝手な邪悪な行いであり、最も厳しい法律で食い止めるべきである」として「政府はインディアンと同様にバッファローを保護すべきである」と強く法案成立を訴えていた<sup>20</sup>。

「家畜の雌牛と同じほど捕獲しやすく穏やかなバッファロー」という捉え方は、西部の荒野を群れを成して疾走するバッファローとは大きくかけ離れており、現実性に乏しいと言わざるを得ない。しかし、この法案は1874年の段階では上下両院で承認され成立寸前までこぎつけていた。最終的には大統領の拒否権で不成立に終わったため、1876年に再度提案され、その際も下院議会では可決されていた。

大統領に不成立を決意させた法案反対意見には、次にあげるように、バッファローを先住民政策の切り札として戦略的に利用する捉え方と、さらにバッファローの絶滅を不可避なものとする捉え方が提示されていた。

法案反対の立場を鮮明に打ち出したのは、1870年から75年まで内務長官を務めたC.デラノ（Columbus Delano, 1809-1896）であった。彼は先住民政策は「インディアンを保留地にできるだけ速やかに移動させること」が最も「平和的」な解決であるとして「獵場から獲物が早急に消滅することは、インディアンをより小さな地域に封じ込め遊牧生活の習慣を放棄させる我々の努力によって大いに都合がよく作用する」<sup>21</sup>と述べていた。デラノに賛同するテキサス選出の議員も、「バッファローの全駆逐が、早ければ早い程、先住民にとっても白人にとってもよりよいことである」<sup>22</sup>とバッファローの消滅を先住民政策の早期「平和的解決」とする見方が提示されていた。

法案成立反対でさらに強く主張されたのが、バッファローを「文明化の障壁」と捉える意見であった。ミシガン出身の下院議員は、「文明化を前に野生動物の消滅を食い止めるような法律を連邦

議会で成立させることなどあり得ない。それらの動物は草を食み、平原を踏み荒らし、我々の開拓民たちが牛や羊を育てようとする場所を踏みつけにしているのだ。バッファローはインディアンと同様、文明から隔絶された存在である」<sup>23</sup>としてバッファローの消滅を是認する意見を述べていた。テキサス選出の議員も、「バッファローは、せいぜい単なる獲物であり、飼いならして家畜動物のように有益なものにすることなどこれまでずっとできなかったのだ。それなのに牛や馬やその他の有益な家畜と同じだけ場所をとり、同じだけ飼料を消費する」<sup>24</sup>と主張して保護法案の必要性を訴えていた。

バッファローの消滅が避けられないことであり、しかも先住民政策に深く関係することと捉える見方は、1869年の大衆雑誌にも次のように展開されていた。

バッファローは1858年以来、確かに減少している。…… バッファローはかつてのようにブラット川に大量に集まってくることはもうない。インディアンは政府の委員たちとの交渉で、バッファローが間もなく消滅するだろという事実、そしてそうなれば赤色の兄弟たちは白人と平和を保っていかなければならないこと、彼らは模様のついたバッファロー（インディアンのための家畜の牛）を食べなくてはならないことを繰り返し持ち出している<sup>25</sup>。

この著者は、バッファローの減少が既に1858年から「確実に」起こっていたと強調すると同時に、バッファローの殺害にかかわっているのは、「一般に白人だと思われているが」実は白人だけではなく、「インディアン戦闘集団もしばしば殺害し、死骸を放置している」と先住民の加担を言及していた。さらに、「そもそもバッファローはオオカミという天敵によって厳しいサバイバルを日常的に強いられている」ことを力説していた<sup>26</sup>。

環境史家の指摘にもあるように、アメリカ社会には、バッファローの存在をアメリカの発展の障害物としてとらえ、その消滅を「文明化の過程」において必要なものとする見方が存在しており、このことがバッファローの激減を招く重要な要因となっていた。西部フロンティアに赴任していたN.マイルズ将軍（General Nelson A. Miles, 1839-1925）の手記は、バッファローの消滅を次のように記述している。

これは残酷で浪費的な贅沢に見えるかもしれないが、バッファローはインディアンと同様、文明化の道、進歩の道に立ちはだかっていた。両者はともに屈しなければならない運命にあった。四半世紀前には野生の獲物の群れを維持していた同じ領土が、今では文明化された国の何千もの人々の食糧となる家畜動物で埋め尽くされている<sup>27</sup>。

バッファローの減少を先住民の過酷な状況とともに、「文明化の当然の帰結」とするこうした見方は、1893年の大衆雑誌にはさらに冷淡な論調で、次のように記述されていた。

バッファローがインディアンの国をうろつく限り、その土地の開拓とインディアンの権利消滅は事実上、不可能であっただろう。彼らの食糧供給を断ち切ることでインディアンはすぐさま馴化し、扱いやすくなった。西部は1883年から開拓が急速に進んだが、もし移動性の高いバッファローの群れが国中を引き続き往来していたら、これほど急速には進まなかったであろう。もしインディアンに同情するなら、バッファローの悲しい運命に対しても勝手に同情すればいい<sup>28</sup>。

### Ⅲ. 19世紀後半の動物擁護運動とネオラマルク主義

バッファロー乱獲を問題とした上記のような賛否の議論は、実は、19世紀後半の次の二つの流れと呼応していたことが指摘できる。ひとつは1860年以降、活発化した動物虐待防止を唱える人道主義者たちの運動であり、もうひとつはネオラマルク主義者たちの適者生存の議論である。前者はバッファローの乱獲が進んだ1870年代から80年代当時のアメリカで、毛皮猟師たちの唯一の障害となった存在であった。バッファロー法案を提出し、バッファローを穏やかな家畜として描く説明を用いて法案成立のための呼びかけを行っていったフォート議員の発議の答弁には、以下に示すように女性動物擁護者たちの声を読み取ることができるのである。他方、後者は、大平原の大群がバッファローから家畜動物へと推移する当時の変化を、「動物学」の立場から適者生存の論理を使うことにより、権威付けする役割を担うものだったと見ることができる。そこでバッファロー保護法案をめぐる議論をさらに掘り下げるため、動物擁護運動を行っていた人道主義者たちの主張、およびバッファロー自然淘汰説を唱えたネオラマルク主義動物学者の主張の分析から、両者が提示した社会的展望について論じていく。

#### Ⅲ－１. 中産階級女性の唱える動物愛護と暴力嫌悪のメッセージ

19世紀後半のアメリカの動物擁護運動は、都市に住む中産階級の女性たちが中心となって展開された。当初、彼女たちが最も力を入れていたのは、動物を使った生体解剖の問題であった。この運動で主張された議論は、「痛み」の感覚を持つ動物へ苦痛を与えることの非道徳性であった。しかもこの生体解剖反対運動は、実験医学で行われる解剖の反対を唱えて医学会と対立したが、動物擁護の女性たちが問題としたのは科学者が行う解剖実験だけではなかった。子供たちの学びの場である学校教育での解剖実験の導入に対しても厳しく反対を唱えていた。20世紀初頭には、生体解剖反対を唱えた女性たちは「動物好きの非社会的人間像」のレッテルを生体解剖推進医師たちから突きつけられるという苦い経験を持ったが、むしろこの動物擁護運動は、動物の「痛み」に着目するという点で動物中心の観点を持ちながら、実は子供の教育というきわめて社会性の高い問題の議論でもあったことに注意を払う必要がある<sup>29</sup>。

生体解剖反対を唱える女性たちが、なぜ学校での動物の解剖を問題としたのか？ 動物に「痛み」を与えることが、なぜ不道徳とされたのか？ さらには、なぜ「痛み」にそこまで敏感だったのか？ これらの点について理解するには、19世紀前半期まで遡り、運動の推進者である中産階級の人々にとっての「家族」の持つ意味とその「近代家族」の出現の背景についての議論が必要となる。

19世紀前半期に多数出版された家庭向け書物は、中産階級の人々に向けて、愛情で結ばれた家族像の模範を提供する役割を果たした<sup>30</sup>。その模範となる家族の基礎として愛情重視の倫理観を育成するために、19世紀初め頃からその著者たちは、動物に対して愛情を注ぐことの重要性を繰り返し提唱していった。犬や猫、あるいは小鳥などの小動物に愛情を注ぐ経験を、子供に家庭の中で持たせることを推奨したのである。こうした家庭での動物愛護を通して子供が愛情深い人間に育つというヴィジョンが、多数の助言本に描かれていった。例えば、子供たちに動物への関心を持たせ動物に配慮する優しさを涵養するための道徳的逸話が、子供を対象とした雑誌には満載されている。あるいは子育て中の母親向けの助言本では、子供の小動物を乱暴に扱う素振りさえ虐待願望の小さな芽と捉え、早期発見早期改善に努め自制心のある愛情深い大人に育てるアドバイスを行っていた。「近代家族」にとって、愛玩動物は愛情で結ばれた家族の重要な構成要素として描かれ始めていたのだ<sup>31</sup>。

動物に「痛み」を与えることが、なぜ不道徳とされたのか。家庭生活の中で愛情 (kindness) を

重要な倫理としてその育成を推奨した助言本の著者たちは、動物を人間と同様に「神の創造物」と位置づけ、苦痛から解放されるべき存在と捉えていた。「神の創造物」として捉えられる動物への虐待は、キリスト教徒として自制心をもって慎むべき行為であると強く戒められたのである。人道主義者たちは、動物虐待防止を提唱することで、こうした穏やかで自己制御のできるキリスト教徒の模範像を「文明社会の理想的構成員」として繰り返し提示していた<sup>32</sup>。

「痛み」に敏感な感性は、動物擁護を提唱した女性たちをはじめとして当時の社会改革を試みている人道主義者たちの特徴として論じられてきたが、はたしてその起源はどこに見出されるのか。これについては、人道主義者たちが奴隷制反対運動を通して培った感覚、すなわち奴隷制の下で厳しい体罰を受ける奴隷たちへの同情・共感から身につけた感性と議論する研究もある<sup>33</sup>。しかし、白人人道主義者たちにとって、「痛み」がもっと身近に意識される状況として、革命期の民衆の台頭、さらにはフランス革命の恐怖政治への危惧などを視野に入れると、彼女たちの暴力に対する過敏なまでの嫌悪の感性をより深く理解することができる。

アメリカ合衆国の独立に続いて起こったフランス革命は、その後のジャコバン政権によって過激な展開を見せていった。元来から大衆の政治参加を「暴力的」と捉えて危惧していた北部保守派は、このフランス革命からの影響を恐れ、「暴力を用いない文明社会」の提示のためにジャコバン政権を強く非難する流血描写を多数取り入れて感覚に訴える言説を大量に発信していった。こうした流血惨事の強調を多用する演説や説教が、それらを聞いて育った人道主義者たちに暴力を嫌悪する「痛み」に敏感な感性を育む契機を提供していたと最近の研究で論じられている<sup>34</sup>。この議論を踏まえると、家庭向け書物に著された動物愛護の逸話の中に、フランス革命についての批判的言及を見出すことができることから、そこに暴力嫌悪の強いメッセージが託されている理由が理解できる。すなわち、動物への虐待に繰り返し警鐘を鳴らし、動物愛護を唱えた家庭向け書物の著者たちは、動物への暴力まで否定することで、「自己制御された文明人」を生み出す家族像を提示していたものと読み取れるのである。

家庭内倫理を説いて「穏やかな家族」像を描き出す著者たちが取り上げていた動物の大半は、家庭内で愛情を注ぐ対象となる動物、すなわち愛玩動物であったが、それ以外の動物についても言及されていた。例えば、少年たちの粗暴な側面の改善を家庭教育のひとつの大きな課題としていた当時の助言本は、スポーツハンティングを好ましくないものと見る議論も掲載していった。またネズミのような、いわゆる有害動物に関しても、作物などを荒らされたことを理由に殺傷することさえ戒められるべき行為と記している。動物を神の創造物と捉えるキリスト教徒の動物擁護者たちには、野生動物と家畜や愛玩動物との差異化の必要性はなかったことが伺われるのである。西部の大平原を旅行して大量のバッファローの死骸が放置された光景を見てきた中産階級の女性が、動物虐待防止協会の中心人物ヘンリー・バーグ（Henry Bergh, 1813-1888）に手紙を出したことが契機となりバッファロー乱獲が問題化されたのは、こうした背景を持つ出来事であったと捉えることができる<sup>35</sup>。バッファローが毛皮猟師たちによって殺傷されることを、「残虐（cruel）」として非難している点、さらに雌バッファローの保護をとくに重視した点にも、家族や子育てを重視する形で動物愛護を唱えてきた中産階級の女性たちの声が色濃く現れていたと言えよう。

8

### Ⅲ－２．ネオラマルク主義の唱えた自然淘汰説

他方、ネオラマルク主義学派は、もともと生物の進化をめぐる議論から出てきた学説である。18世紀中頃に生まれたフランスの動物哲学者ジャン＝バティスト・ラマルク（Jean-Baptiste Lamarck, 1744-1829）は、環境の変化に対する有機体の変容を進化のメカニズムと考える生物議論を構築し



ていった。実際にはラマルクの生物進化のメカニズムの解釈は生物学の世界では認められず、C. ダーヴィン (Charles R. Darwin, 1809-1882) の自然淘汰説が世の脚光を浴びる説となった。しかしアメリカではこの環境の変化による獲得形質の遺伝というラマルク主義がダーヴィンの登場以降も継続的に関心を集め、両者の学説を一種融合させたとも言える議論を、ネオラマルク学徒が19世紀後半、古生物学および動物学の分野で活発に展開していった<sup>36</sup>。

ネオラマルク学徒の一人、J.アレン (Joel A. Allen, 1838-1921) が、1870年代のバッファロー乱獲が進行する最中にまとめたのが『アメリカバイソン』(American Bisons, 1876) という著作である。この著作でアレンは、バッファローすなわちバイソンにはいくつかの種類があることを化石に残された骨をもとに分類した上で、過去に絶滅した種類のバイソンに注目し、当時北米大陸に生息していたバッファローも、近い将来には絶滅する運命にあると結論づけていた<sup>37</sup>。彼の議論で注意すべき点は、絶滅を防ごうという発想は全く見られない点、および絶滅に迫りやる環境の変化が人間による乱獲のような人為的なものであっても天候自然の作用と同様の扱いをしていた点であろう。アレン以外のネオラマルク学徒の議論についても指摘されているように、彼らはヨーロッパ系文化に向かう人為的变化を進歩として捉える傾向を強く持ち、その人為的变化も進化を促す環境の変化と捉えて説明を試みていった。すなわち、自然淘汰を劣等から優等なものへの移り変わりの過程と捉える議論を構築していき、野生動物から家畜動物への移り変わりを「野蛮」から「文明」への好ましい適応過程とする見方を提供していったのである。

こうした動物学者の大胆な、動物観を超えた社会観、文明観が、実はバッファロー保護法案成立の大きな妨げとなった。この「野蛮」と「文明」の二項対立の議論は、バッファローや先住民を擁護することさえ、アメリカの進歩の妨害者とみる議論に集約する効力を持った。このアレンのバッファロー絶滅を自然淘汰とする説が出されて以降、バッファローを「文明」の進行の妨害者、家畜や羊のための平原を踏みつける非文明と捉える議論が横行した。環境史家アイゼンバーグの指摘にもあるように、バッファロー乱獲の問題は、こうして「文明」対「野蛮」という単純な二項対立の議論に陥っていったのである。

### Ⅲ-3. 異なる「文明」観とひとつの「馴化」の概念

ネオラマルク学徒であるアレンの提示した動物観は、自然淘汰説や適者生存説など科学言説を駆使した動物観であった。それが、文明論、社会論に発展し、先住民の生活にまで影響を及ぼした。ここで注意したいのは、ネオラマルク主義の議論も、人道主義者たちの提示した動物愛護の議論も、ともに「文明」というキーワードを共有していながら、両者の提示した「文明」のイメージには大きな隔たりが指摘できる点である。

ネオラマルク主義の議論は、「未開」と「文明」というかつてヨーロッパ啓蒙主義者たちが提示した「文明観」<sup>38</sup>を「競争」、すなわち「争い」の枠組みの中にはめ込んで提示したものと理解することができる。「文明」と「未開」は戦っている、だから「未開」ではなく、「野蛮」と解され、その戦いに勝ったものが「適者」として生き残る、それが自然淘汰である、という論理を提示した。こ

9

ここで注意したいのは、この「争い／戦い」という暴力行為は、愛情重視の家庭倫理を提唱した人道主義の女性たちがまさに否定していた行為であるという点だ。

中産階級女性の動物愛護は、家庭動物や家畜に限定して虐待防止を唱えていた訳ではなかった。野生動物も「神の創造物」と捉えることで、それらの動物にも配慮をする観点は矛盾なく成立した。しかも雌バッファローの殺害を禁じるという法案は、子育てをする母親バッファローに注目することで、「文明世界」の枠を超えて非文明と見なされた世界に人々の共感を広げる試みだったと読み取

る余地が見出せる。すなわち、愛情で結ばれた家族の住む「安全な場としての家庭」を「文明社会」の実現の重要な装置と捉えていた動物愛護の提唱者たちは、バッファローの保護提唱を通して「文明」の枠を超えた「非文明」とされる領域への「痛み」の防止の拡大を試みていたと読み取ることができるのではない。

しかしながら、バッファローを擁護する人道主義者たちの議論の中で、盛んに強調されていた「穏やかなバッファロー像」の意味を考えると、実は動物擁護の別の側面も見えて来ることに言及したい。かつて大群をなして荒野を走り、熟練した猟師たちが威力のあるライフルで射撃してはじめて倒すことのできたバッファローを、穏やかで家畜の雌牛のように扱いやすい存在と捉えて描写することには次のような問題が潜んでいる。バッファロー保護を唱える動物擁護者たちのバッファローイメージは、荒々しい荒野に生息する力強い野生動物としてのバッファローではなく、制御可能な馴化された動物としての受容にすぎない。これは西部の荒野に対しても、開拓され制御された地として変化していくことを当然視する見方と実は深層の意味で共通する。先住民に対し保留地におとなしく留まることを要求する当時の先住民政策とも共通する見方である。暴力的な対立を否定する人道主義の女性たちに、その暴力の否定を唱えるだけでそこにバッファローや先住民の当時のあるがままの姿を受け入れる視座が伴わないなら、彼女たちの唱えるバッファロー保護も、制御可能な状態への変容の要求となってしまうであろう。この点から見ると、バッファロー激滅を食い止める点においては、現実的な効力は期待できない。

### 結びにかえて

本稿では、19世紀後半に展開されたアメリカにおける西部開拓の過程で絶滅寸前にまで追い込まれたバッファローの問題を取り上げ、その激滅の要因を提示した上で、バッファロー乱獲をめぐる当時の議論の分析をおこなった。それによって少なくとも次の三点について描写できたものと考えている。一点目には、バッファロー激滅に直面したアメリカ社会で提出されたバッファロー保護法案をめぐる賛否の議論のそれぞれには、愛情重視の家族内倫理育成の観点から動物愛護を唱えてきた中産階級女性たちの動物擁護活動と、適者生存を唱えることでバッファロー絶滅を擁護するネオラマルク主義の議論の流れが反映されていた点である。二点目は、その両者の議論はともに「文明」をキーワードとしながら、それぞれが描き出す「文明観」は「暴力」あるいは「争い」という観点から見るなら全く別の社会観を提示するものであった点である。しかしながら三点目として、バッファローの保護を唱えた動物擁護派の描き出したバッファローイメージには、「馴化」を前提とする姿勢が明確に表出されていた点から、バッファロー保護派にも西部の地を開拓し先住民族を保留地に閉じ込めるバッファロー乱獲推進派の議論との共通性が潜んでいたという点である。

以上のように、バッファローをめぐる議論の分析からは、当時のアメリカ社会に全く別の角度から出された2つの動物観が存在していたことが描き出された。この二つの動物観は、一方はキリスト教的価値観に根ざした家族愛を重視する女性たちの動物愛護、他方は動物学、古生物学を研究する男性の自然淘汰論というように、全く異なる提唱者による議論である。そして当時のアメリカ社会でバッファロー乱獲と先住民政策が政治懸案として議論された時、影響力を行使したのは明らかに後者であったことは、当時のアメリカ社会の性質を映し出すひとつの重要な側面であろう。しかし不成立という結果になり、さらには上記三点目に指摘したような時代の制約はあったとはいえ、連邦議会という場に提出された保護法案の文言には、確かに動物愛護を唱えていた女性たちの声とその意図が読み取れることを、本稿は明らかにできたのではないだろうか<sup>39</sup>。

表 1：19世紀後半に都市を中心に結成された動物虐待防止協会の主なもの

1866年	動物虐待防止協会（American Society for the Prevention of Cruelty to Animals）
1867年	ペンシルベニアに動物虐待防止協会（PASPCA）
1868年	マサチューセッツ及びサンフランシスコに動物虐待防止協会
1869年	イリノイ及びミネソタに動物虐待防止協会 動物虐待防止協会女性支部
1874年	子供の虐待防止協会（ASPC to Children）
1877年	アメリカ人道協会（American Humane Association）
1883年	生体解剖禁止を求める会（American Anti-Vivisection Society, AAVS）
1892年	AAVSのジャーナル <i>Journal of Zoophily</i> 刊行
1894年	AAVSが支援してジャーナル <i>Anti-Vivisection</i> 刊行

## 註

1. James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980); ジェームズ・ターナー 著／斎藤九一 訳『動物への配慮 — ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』(法政大学出版局, 1994).
2. Lisa Mighetto, *Wild Animals and American Environmental Ethics* (Tucson: University of Arizona Press, 1991).
3. Andrew C.Isenberg, *The Destruction of the Bison: An Environmental History, 1750-1920* (New York: Cambridge University Press, 2000).
4. A.アイゼンバーグは1500万頭と推計しているが、R.ホワイトは最近の著作で800万頭とする推計を採用している。R.White, *Railroad: The Transcontinentals and the Making of Modern America* (New York: W.W.Norton & Company, Inc, 2011).
5. George Catlin, *Letters and Notes on the Manners, Customs, and Conditions of the North American Indians* (1844; repr., 1973), 2; 17 quoted in William Cronon, *Nature's Metropolis: Chicago and the Great West* (New York: W.W.Norton & Company, Inc., 1992), 215; また19世紀後半バッファロー狩りの経験者たちの記録の手記が多数、出版、再版されている。例えば次のようなものがある。Colonel Homer W.Wheeler Introduction by Thomas W. Dunlay, *Buffalo Days: The Personal Narrative of a Cattleman, Indian Fighter, & Army Officer* (1925; repr., Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1990); Granvill Stuart, *Forty Years on the Frontier* (1925; repr., Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2004); James H.Cook, Forward by J Frank Dobie, *Fifty Years on the Old Frontier* (1923; repr., Norman: University of Oklahoma Press, 1980); William T. Hornaday, *The Extinction of the American Bison, with a Sketch of its Discovery and Life History* (1887; repr., Milton Keynes: Dodo Press, 2008).
6. Joseph Nimmo, *Report in Regard to the Range and Ranch Cattle Business of the United States* (Washington,D.C.: GPO, 1885), 2, quoted in White, 463.
7. たとえば、Theodore R. Davis, "The Buffalo Range," *Harper's New Monthly Magazine*, 38 (Jan., 1869),147-163.
8. Isenberg, 123-163.
9. Richard I.Dodge, *The Plains of North America and Their Inhabitants* (Newark: University of Delaware Press, 1989),155.
10. Ibid.
11. Robert M. Wright, *Dodge City, The Cowboy Capital* (Wichita,KS.: Wichita Eagle Press, 1913), 75; Isenberg, 134.

12. White, 466.
13. David D. Smits, "The Frontier Army and the Destruction of the Buffalo: 1865-1883," *Western Historical Quarterly*, 25 (1994), 313-338.
14. Frank H. Mayer and Charles B. Roth, *The Buffalo Harvest* (Denver, 1958), 29, quoted in Smits, 332.
15. Isenberg, 140-142.
16. Romanzo Bunn, "The Tragedy of the Plains," *Forest and Stream*, 63 (October 29, 1904), 360-361, quoted in Isenberg, 142.
17. Davis, 153.
18. *Daily Rocky Mountain News* (December 21, 1873), quoted in Eugene D. Fleharty, *Wild Animals and Settlers on the Great Plains* (Norman and London: University of Oklahoma Press, 1995), 259.
19. *Congressional Record*, 1876, 1237-8, quoted in Fleharty, 260-261.
20. *Congressional Record*, 1876, 1238, quoted in *ibid.*, 261-263.
21. Columbus Delano, *Annual Report of the Secretary of the Interior*, 1873, iii-ix.
22. Isenberg, 152.
23. *Congressional Record* (March 10, 1874), 2107, quoted in Isenberg, 155.
24. *Congressional Record* (February 23, 1876), 1239, quoted in *ibid.*
25. Davis, 153.
26. *Ibid.*, 153-154.
27. Nelson A. Miles, *Personal Recollections and Observations* (1896; repr., New York, 1969), 135, quoted in Smits, 333.
28. Hamlin Russel, "The Story of the Buffalo," *Harper's New Monthly Magazine*, 86 (April, 1893), 795-798.
29. 19世紀後半の生体解剖反対運動については、詳しくは、拙稿「19世紀後半の生体解剖反対運動についての研究動向と新たな展望 — アメリカ社会における科学、ジェンダー、動物観を議論する意義を中心に」『国際経営・文化研究』Vol.14 No.2 (2010年3月), 37-48, を参照されたい。
30. Mary P. Ryan, *The Empire of the Mother* (New York: The Haworth Press, 1989); Katherine C. Grier, *Pets in America: A History* (Orlando: Harcourt, Inc., 2006).
31. 「近代家族」と動物については、拙稿「19世紀前半期アメリカの「家庭」における動物と「痛み」の感性 — 動物愛護が語られる場としての「近代家族」に焦点をあてて」『国際経営・文化研究』Vol.15 No.2 (2011年3月), 67-82, を参照されたい。
32. 前掲書, 74-78.
33. Elizabeth B. Clark, "The Sacred Rights of the Weak": Pain, Sympathy, and the Culture of Individual Rights on Antebellum America," *Journal of American History*, Vol.82 No.2 (Sep., 1995), 463-493.
34. Rachel Hope Cleves, *The Reign of Terror in America: Visions of Violence from Anti-Jacobinism to Antislavery* (New York: Cambridge University Press, 2009).
35. Zulma Steele, *Angel in Top Hat* (New York: Harper, 1942), 162.
- 12 36. アメリカのラマルク主義、およびネオラマルク主義については次のものを参照した：
 

Peter J. Bowler, *Evolution: The History of an Idea*, (Berkeley: University of California Press, 1989); Edward J. Pfeifer, "United States," in Thomas F. Glick, ed., *The Comparative Reception of Darwinism* (Chicago: University of Chicago Press, 1988), 168-206; Lester D. Stephens, "Joseph Leconte's Evolutionary Idealism: A Lamarckian View of Cultural History," *Journal of the History of Ideas*, 39 (3) (Jul.-Sep., 1978), 465-480; George W. Stocking Jr., "Lamarckianism in American Social Science: 1890-1915," *Journal of the History of Ideas*, 23 (2) (Apr.-Jun., 1962), 239-256.
37. Joel A. Allen, *American Bisons: Living and Extinct* (Cambridge, 1876), 180-181.



38. 啓蒙主義に関しては、以下のものを参照した：弓削尚子 著『啓蒙の世紀と文明観』（世界史リブレット88）（山川出版社, 2006年）；ウルリヒ・イム・ホーフ 著／成瀬治 訳『啓蒙のヨーロッパ』（平凡社, 1998年）; Emmanuel C.Eze ed., *Race and the Enlightenment*, (Massachusetts: Blackwell Publishers, 1997).
39. バッファロー激減から最も深刻な影響を受けたのは、勿論ラコタ族など大平原部族である。彼らの暮らしの変化、文化変容の問題に関しては、別の機会に論じたい。

（受理 平成25年9月27日）